

幼 兒 教 育

第 二 十 二 卷 第 七 號

大 正 九 年 七 月 十 五 日 發 行

目 次

乳兒幼兒の保護を如何にすべきか	生江孝之
幼兒の供述	塚原政次
楽しい思ひ出	愛友幼稚園
嵯峨行きの記	日彰幼稚園
ノートの中より	K . T
螢來い。水鐵砲。桃太郎。鳩。	土川五郎
雜錄(講習會。音樂會。其他)	
少年音樂家(四)	岡田美津

日 本 幼 稚 園 協 會

會 告

○會費御拂ひ込みの節は御名前は初め御入會の時の御名前と御同一になし下され度く、例之ば初め幼稚園名にて御入會、後、個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき様必ず願上候整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに互り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左様御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

本誌定價

一册(郵稅共)金貳拾五錢 六册 前金壹圓五拾錢
十二册 前金 參 圓 (郵券代用壹割増)

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正九年七月十二日 刷

大正九年七月十五日 發行

東京市日本橋區岩附町一番地
編輯兼發行者 小 高 艶

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者 柴 山 則 常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所 杏 林 舍

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會

小梁 松田 耕田 輔貞 生先 生先 作曲 清水良雄畫伯 裝幀

伴

奏

附

樂

譜

伴奏
 附樂譜は大正
 幼年唱歌と大正少
 年唱歌の中から最も評判
 のよい十曲を選んで伴奏を附
 けたものです學校に於ける唱歌教授
 の改良と家庭に於ける音樂趣味の向上と
 は伴奏附樂譜の二大使命であります

一 お馬 二 汽車 三 大砲 四 羽衣 (以上既刊) 五 お猿

六 土産のつゝら 七 笹舟 八 どんび 九 コスモス

十 お星様 (以上續刊)

菊判二倍大、石版十數度刷の裝幀は

高尚で優美

定價各四拾錢

郵税四錢

づゝ

東京馬場二丁目南 目録書店發行 振替口八〇九番 東京

廣島高等師範學校訓導 山本壽・橋本留喜・田上新吉三先生共著

學校で
出来る
お芝居

唱歌劇 第一集 舌切雀

定價 金五拾錢
郵税 金四錢

新教育
の特徴

兒童の本性は遊戲的であり、活動的であり、藝術的であります。彼等は幼いために遊戲するのではありません。遊戯するためには、幼稚時代があるのです。彼等の無邪氣なる遊戯は是れ天眞爛漫清純潔白なる劇そのものではあります。凡そ今日の知的に偏した教育は不自然であり殺風景であります。吾人は此の際大いに兒童の感的教育を高調し以て優雅高尚なる人性美の發達に努められねばなりません。

廣島高等師範學校訓導 山本壽先生著

愛ら
しい
唱歌

尋常小學唱歌

定價 金貳拾五錢
郵税 金貳錢
二年用以上續刊

一年
目次

一 二 三 四 五

お日様
猿蟹合戦
百切雀
取り雀
七九八七六
木口小花
お正月
飛達
行機

本書は著者が實地に唱歌を教へる際に「これだけは是非とも今日の唱歌教材中にあつてほしい、また改めてほしい」と思はれたものに對して、自ら作曲されたものであります。多年の経験と豊かな樂才とを有つて居られる著者によつて、本書の發刊を見ましたことは、斯界のため洵に慶賀に堪えません。

幼 兒 教 育

第二十卷
第七號

大正九年七月十五日發行

乳兒幼兒の保護を如何にすべきか

内務省囑託 生 江 孝 之

兒童保護の問題は、今や世界の大問題となつて、
いろ／＼の方面に其運動が起つてゐる。殊に今度の
大戦中及戦後には、一層その必要がみとめられて來
た。

歐洲に於ては、聯合與國は、戦時中は多額の軍資を
要し、また、醫師看護婦等が缺乏してゐた際にも拘ら
ず、兒童保護に對しては、實によく、人と金を惜
まなかつたのである。ことに、胎兒及乳兒の保護と
いふことに重きを措き、英國のことは、法律を制定
して、この方面に努力した。これは英國のみならず
佛國も、ベルギーも同様で、國事多端の折柄、兒童
保護問題には一般に多大の注意を拂つて居つた。

米國に於ては、大戦開始の翌年から、政府並に民
間の有志者が聯合して、この保護事業のために大に

努力したのである。ことに顯著なるものは、かの一
九一八年の Children's Year (兒童の年) である。即ち
同年四月から一箇年間特に兒童の保護の大宣傳を試
みたのである。これは、政府側としては、聯合政府
の勞働省内の兒童局、民間側としては國防協會の婦
人部が、専らその衝にあつたのである。その事業
の主なるものとしては、先づ乳兒及び幼兒の死亡の
減少を計らうといふ事にある。米國では、五歳以下
の幼兒が、年々三十萬人死亡する。この中、専門醫
師の斷定によれば、十五萬人即ち全體の半分は、母
親の無智及貧困が主なる原因であるといふ事で、こ
れが事實ならば、即ち一方、母親に對しては、乳兒
及幼兒の取扱上に必要なる知識を授け、他方、貧民
の賃金を高めてその窮乏をすくはねばならぬ。然る

に、實際問題としては、國の經濟狀態といふものはさう俄かに變更することは出来るものではないので、この Children's Year に於ては、貧民の賃金を増す方の運動は他に譲り、専ら母親の育児上の知識を増し、無智と不用意からまねく幼児の死を極力ふせぐといふ事に努力することゝなつた。而して、當局者の考へでは、もしこの運動がよくはこへば、十五萬人の死亡幼児全部を救ひ得ると迄はゆかずとも、十萬人位の死亡幼児(五歳以下の死亡三十萬人と計へられ居る故にその三分の一となる)を、救ふ事が出来るといふわけで、その實現に力をそゝいたのである。

扱、その實際の方法としては、第一に、五歳以下の幼児の健康状態を知るといふことである。といつても、あの廣い米國の全體にわたつて調査するといふことは大變な事である。兎に角、比較的徹底的に之を知るために、先づ米國全體にわたつて、五歳以下の幼児の身長と體重とをはかり、之に生年月日、父母の生地を記入する。これによつて、彼等幼児の健康状態を知らうといふのである。しかるに、これは、このごろ日本で企てられてゐる國勢調査の様に

政府の力で強制的にするといふ事は出来ない。何處迄も任意にせねばならぬので、寧ろ相談的に、子をもつ親にたのんで調査させてもらふといふことになる。しかし、實際この場合には、米國全體、到る所に支部を設けて、(これは主に國防協會の婦人部が引受けて)此處で大に努力したのである。それで實行上のことゝしては、各支部が何れも、中央政府から送つて來る一定の様式に従つて調査したのである。即ち、一九一八年四月より六月の二箇月にわたつて出來るだけひろく調査し、七百萬人の五歳以下の幼児について結果を得たのである。七百萬人といへば米國全體幼児數(五歳以下)の三分の二にあたるわけで、數としては先づその大なるものといはねばならない。

この結果として、如何なることがなし得るかといへば、先づ各幼児が健康上如何なる状態にあるかによつて、その母親に適當の注意をあたへることが出来る。また、その幼児達の屬する村、又は區にそれぞれ注意して、其處に、特に、幼児保護に必要な施設をすることを勧告する。かくすれば、個人的にはその各兒の母親は、その子の健康を一層増進させる

ために努力するし、各村、各市、各區はそれづくに適切な施設をするといふことになる。これによつて乳兒の死亡率を減じようとするのである。しかし單にこれだけの調査で、すぐに、その効果をあげるといふことはむづかしいのであるが、事實上、米國に於ては、最近十年間に各大都市に、既に、胎兒、乳兒、幼兒の保護のために努力する機關が設けられて居つたので、それに加へて、かゝる事業が始まつたために、一層この方面の刺戟となつたわけである。

この事業が如何に實行されてゐるかといふに、かのニウーヨーク市及びシカゴ市に行つて見るとそれはよくわかるのである。失づニウーヨーク市には、母親相談所といふのが八〇箇所ある。その中六〇はニウーヨーク市立で、他の二〇は、私立團體の經營になるのである。

此處では、主として、生後一箇月から、一箇年の間及び更にその後二年間にわたつての、健康なる幼兒について、その健康を持續し、更にその健康を増進するといふ事につくすのである。即ちニウーヨーク市にある六〇の市立相談所には、各所に何れも醫者と、看護婦とが居る。醫者は、一週に一度乃至二

度その相談所に出張してゐる。この日に、母親はその幼兒を此處へつれて來て、先づ第一に、看護婦の手で、身長、體重をはかつてもらひ、次に醫者に、健康状態を査察してもらふ。そしてその健康兒が如何にせば、その健康を持續し得るかの注意をうけ、又健康といつても、少しよわいやうな子は、どうすれば發育充分になるかを、よく相談する。そして原則としては、母親は一週に一回は必ず此處にその子供を連れて來て、査察をうけ、相談するといふことになつて居るが、實際は、一箇年に二十回もしくは三十回ぐらゐ來る割合である。かくのごとく、公私を通じての相談所で取扱ふ乳兒は、ニウーヨーク市だけで、實に七萬五千人（これは延べ人員でなくて、實數、即ち一人の子が何度來ても、それは一人と計へて）である。ニウーヨーク市で一箇年に生れる子供の數は十二萬人と算せられてゐるから、その中の七萬五千人——これは何れも健康兒であるが——一箇年二十回も相談所の注意をうけて、その有する健康を、一層維持増進して行くといふ事は、實に數の上でも驚くべき好成绩といはねばならぬ。十二萬人の中、病兒はこの相談所へは來ないわけであるから、

健康兒で、相談所に來るべき必要の子供等は殆ど來てゐるといふことが出来る。この結果として、乳兒の死亡數が、ニウーヨーク市だけでも、年々減じてゐるのは明らかなことである。

十數年までは、百分の一四乃至一五であつたのが現在では、百分の九乃至八・五の割合をしめしてゐる。且亦、この相談所に來た子供の死亡の割合は、一四〇人の中一人を越えぬといふ状態で、實に大都市におけるかゝる成績は、他に類のないことである。しかも、生後一箇月にみたぬものは、相談所で取扱はぬわけであるから、死亡が一四〇人中一人にみたぬといふことは、やがて米國における乳兒の死亡を餘程の程度まで減じ得ることを豫想せしめる。徹底的にすればかゝる結果をえられるものである。

扱、相談所の仕事としては、單に一週に一度だけ母親が子供を連れて來て査察をうけるといふばかりではなく、此處に屬する看護婦が毎日、午後、自分の受持の區域内の家庭を訪問して、家にある子供の状態をよく視察して、それづくに、必要な注意を與へるのである。かくのごとく、一方には醫者からいろいろ親切に注意してもらひ、また他方には家庭にお

けるこまかい注意を看護婦からうけるので、母親は實に安心してその子の健康のための、いろいろの取扱ひ法を教へられ、之を實行する。これによつて、乳兒、幼兒の保護は、餘程、徹底的に行はれるわけである。

看護婦といふことについて、序に一言しておきたいと思ふ。看護婦の中で小學校に屬する即ち學校看護婦は、ニウーヨーク市だけで二百三十人居る。彼等は平素は、各々學校に於て兒童の保健のことに奔走して居るが、休暇の時には(即ち夏期、七月、八月の兩月のごとき)何れも母親相談所に屬する看護婦をたすけて、これらごときにも、ニウーヨーク市の細民地區全體を訪問する。そして、健康乳兒の健康維持とその増進とをはかり、また、この場合には、病兒をも勿論世話するので、その恢復のために相當の方法を講ずるのである。ニウーヨークに初めて母親相談所の設けられたのは、凡そ今から十年程までであるが、佛國におこつたのは、これよりもふるく、一八九〇年即ち今から三十年もまでである。しかし、目後からおこつたニウーヨークの相談所の働きは、目覺ましいものである。

シカゴ市には、母親相談所は公立が少くて私立が多いのであるが、その、幼児保護の上に力をいたす事はニウヨーク市におけるものと少しもかはらないのである。しかも、上述の健康乳児の家庭内の生活をよくさせるために看護婦が、家庭を訪問する事や、母親に對するいろいろ親切な忠告にいたつては、その徹底的なること、實にニウヨーク市にまさると云ひ得るかと思ふ。乳児の死亡も、もとより次第に減じて行くが、シカゴ市におけるその割合は一〇〇分の一一位である。

ひるがへつて、我國における乳児の死亡率は如何といふに、ニウヨーク市及びシカゴ市に比較的近き關係にある都市は大阪市であるが、同市における乳児死亡率は、實に一〇〇分の二三乃至二五である。堺市に於てはこれ以上の状態である。世界に於て、最も、乳児の死亡率の高いのは、オーストリアと我が日本とである。しかも、オーストリアの方は年々死亡乳児数が減じつゝある。嘗つては、獨逸もこの率は高かつたのであるが、最近十年間には著しく減少したのである。しかるに、我國のみは年々この率が高まるばかりであるといふことは實になげかは

しい次第である。國家のため、誠に不幸であるといはざるを得ない。米國に於ては、既に各都市における乳児、幼児の保護事業が餘程、徹底的になつてゐるのにその上に、尙、上述の様な Children's Year といふやうな年を設けて、皆の注意を集めるのであるから、死亡率は減少するばかりである。我國にては乳児死亡の増加は實に著しいにも拘らず、相談所ともいふべきものは一二を數ふるほか、見るべきものがないといふことは誠に遺憾なことである。我國においても、乳児の死亡には、母親の無智に基因するものが、なか／＼多いといふことは、いふ迄もないことである。そしてまた、子供は、元來母乳で養育するといふことが大に乳児死亡の數を減ずるといふことは、今や、一般に認められてゐることであるが、幸にも、我國は、ほとんど習慣的に母乳哺育を實行して居るので、これは實に、我國の誇ともいふべきである。外國では、母乳哺育といふことをあまりせぬので、近來は奨励金までも出して、之をすゝめておる位である。我が國に、この母乳哺育といふ良習あるにも拘らず、尙ほ乳児の死亡率が高いといふことは、つまり、母親の無智、また貧困の然らしむる

ところと云はねばならぬ。しからば、この方面にまた、力をそゞぐことが必要である。一方、細民の収入の増加をはかることも、他方には、母親の教育といふことが大切である。即ち、母親相談所のごとき設備が社會的に増設せられんことは、目下の急務であると思ふ。そして、専門の醫者につき、看護婦について健康兒の健康の持続と、増進について相談するといふことは、實に子をもつ母親にとつて、どんなに力になることかしのれない。

近頃、東京社から出る婦人界といふ雑誌が、育兒その他のために、特に、相談欄をもうけて、丁度母親相談所の様な仕事を、紙上で試みてをるやうであるが、これは、蓋し時機を得たやうかたといへやうと思ふ。中流階級の母親達の不注意や、知識の缺陷を、幾分おぎなふことも出來やう。

日本が、ここに、中流社會の人達に於て、幼兒取扱の知識がとばしいといふ證據は、幼兒の死亡數は實に英、佛のそれに比較すると、殆ど二倍であり、その多くが胃腸病のためといふことでわかる。即ち貧なるが故に榮養不良、死にいたらしめるのでなくむしろ、食べさせ過ぎや、食物選擇上の不注意から

まねく死が多いのである。

かく考へて見ると、母親相談所、或は婦人雜誌にこの欄をもうけること、或は看護婦の家庭訪問などによつて、この缺を補ふことに極力、力を致したいものである。

此處には主として、乳兒保護について申し上げたのであるが、乳兒以外の保護事業については、また機會を得てのべることに、する。

(談話——未校閱——文責筆者)

○極端なる自然の制裁

いたづら、子が手當り次第物を壊す、しかし、只之に對して怒つてはならぬ。品物の方を手のとどかない所に片附けるがよい。もしも子供が自分に必要な物を壊してしまつたら、もう、同じ物を與へないがよい、そして「壊して不便になつた」と云ふ事を自然に感ずる様に仕向けるかよい。例へば子供が自分の室の硝子を壊したら、晝も夜も風が吹き込むまゝにして置くがよい、その子供が風邪をひくだろうかなどと心配しないで。何故なら、子供が自分で、氣をつける、と云ふ事を學び「壊して困つた事になつた」と悟る事が出来る事は風邪ひく位な些事にはかへられない大切な事であるから。(エミール)

幼 兒 の 供 述

— 日本幼稚園協會六月常會講演大要 —

文部省督學官 塚 原 政 次

○ 供述の意義

供述といふ言葉は、日本で心理學上用ひられてゐるのは、獨逸語の Aussage から來たので、これの本來の意味は、裁判所で用ひられたものである。即ち原告、被告、證人が裁判官のまへで「云々に相違ございませぬ」と誓つて述べる、これをいつたのである。しかるに現今では、これは法廷のことに限らず、一般に、觀察もしくは經驗したことを述べるのに用ひられてゐる。私が今、此處でいふ「幼兒の供述」といふことは、この意味でいふのである。

○ 幼兒の供述には誤りが多い

子供は正直なものである、とは、よく人のいふことで、成程、子供は人に祕密にすべきことでも、遠慮

すべきことでも、何の臆するところなく平氣でいふ、しかし、また他面から觀察すると、幼兒の供述には、嘘言が多いといふことも考へなければならぬ。けれども、こゝに云ふ嘘言とは、大人が用ふる惡意のものとは異なるので、幼兒は自分で信ずるところをのべる。嘘言をつくつもりにもなしにのべる、それが、結果として見る時に嘘言が多いのである、いはば、自然的の嘘言とも云へよう。

子供のいふことが、法律上に於て、證據とならないといふのも、此處にあるので、少し古い話にはなるが一九〇五年に、獨逸ベルリン市で、兒童學會の總會を開かれた時に、一四歳以下の子供のいつたことは、證言として價値はないといふことが、決定されたのである。我々の日常生活に手近い例をとつて考へて見ても、主人が子供の供述をそのまゝ本氣にす

るために、僕婢をせめて、彼等の召使ひに迷惑をかけることもある。或は嫁、姑の喧嘩のごときも、兩方が、子供の言ふことを楯にとるところから始まることもある。「子供の喧嘩に親が出る」といふことは昔からいはれてゐるが、貧民長屋などでよく見る現象もやはり、子供のいつたことをそのまゝとつて親同士が争ふことに原因するのが多いのである。この時に親同士が、子供は時に途方もないことをいふものだからいふことを承知して居れば、争ふさきに果してその言ふ通りか否かをしらべる餘裕が出来る譯である。

幼稚園でも、幼児の供述のあやまりといふことは屢々経験することである。蓋し「我」の觀念といふものは、三歳以後になつて、初めて出来るものである。即ちこのころから所有觀念が發達して來るので、自他の區別が出来る。これが出來てからでなければ、幼稚園で收容することは、困難なことである。實際には、兒童預り所の様に三歳以前から、收容してゐるところもあるが、この取扱ひはなかく困難が多いのである。私の知人がある時、「どうも子供が喧嘩ばかりして困る、母親は朝から晩まで、喧嘩の

仲裁ばかりしてゐる」といふので「何歳か」ときくと數へ年五歳の兄と數へ年三歳の弟だといふ。私はこの時、「それは無理はない、喧嘩するのが當り前だ」と答へたのである。何故なら、兄の方には既に所有觀念が出來てゐるから自分のものはとられまいとする。けれども、弟の方はまだ自他の區別がつかないので、兄のものをいつもごちや／＼にするのは無理もないのである。この所有といふことで、子供の供述のまちがひが幼稚園でしばしばおこるのである。

例へば、帽子をたしかに朝かぶつて來たといふから、さがすが見當らぬ。一緒にいつもつれだつて來る子供達にきくと、やはり「誰さんは、たしかに今朝かぶつて來た。僕見たよ」などと證明する。いくらさがしてもない。困つてゐると翌日になると、その子供は、平氣な顔して昨日大騒ぎさせた帽子をかぶつてやつて來る。實はその前日には、かぶらずに來たのである。かうした例は、子供の所持品の上にはば／＼おこることである。子供を證人にたてることは決して出來ない。しかるに、廣く社會的に考へて見ると、まだ時に、その供述の上にかゝるあやまりの多い時期にある子供を信じすぎる傾向がある様に

思はれる。嘗つて、十歳の子供が證人になつて犯罪がきまつたといふことを新聞記事で見ることがあるが、これは餘程考へねばならぬことである。

○供述の誤りの原因は何處

にあるか

扱、幼兒の供述のあやまりといふことは何に原因するかといふことを少し考へて見やう。先づ次の諸點に歸すると思ふ。

(一) 觀察の不精密なること——これは、大人でも決して觀察は精密だとはいはれないのである。特に科學者が、動植物の觀察をする場合は別として普通我々は、いつも、そんな丁寧に、事物を觀察してはゐない。例へば、満月の夜に、百人の人が集まつて月の大きさを論ずるとする。ある人は、盪ぐらゐといひ、或は金盪ぐらゐ、井ぐらゐなど、眞に不正確なことをいふ。月の色を論じてもまた同じ様で、月そのものにはかはりはないけれども、觀察の仕方によつて實にいろ／＼になる。よく心理學の實驗などですることであるが、三錢切手がある時間見せて、後直ちに各々の見た所をしるせといへば、色だけをか

くもの、縁だけをかくもの、字だけをかくものなど實に、まち／＼である。これは各の精神的組織の差異、性來の傾向、教育經驗などによつて、ことなるのはいふまでもない。この不精密といふことが、特に子供には著しいので、供述のあやまりも、不正確なことをそのまゝ平氣でいふためから來ることが多いのである。

(二) 空間知覺及び時間知覺の不確實——幼兒の世界には、時はない。あつてもきわめて不正確なもので昨日も、今日も、明日も子供の頭の中では、ごたごたで、はつきり區別はしてゐない。

空間知覺とは、大き、距離の知覺で、これは大人にしてもさうである。特に練習した人は別として、普通我々は、なか／＼目分量といふものがうまく行かない。例へば船にのつた場合にしても、「此處から燈臺まで何哩」ときかれてもすぐにはわからない。室の大きさなども、なか／＼間違ふことが多い。大きさや距離の觀念は、眼だけではなか／＼わかるものではない、筋覺や、皮膚覺がこれにともなつて出来るのである。歴史は時と、場所と、誰といふ即ち三つの W (when, where, who) があつて初めて成立するもので

あるが、子供の供述に於ては、この時間もまた空間もその知覚が、まことに曖昧なものなのである。

(三) 兒童の記憶の不確實——子供は記憶がよいといふけれども、それは、相當に大きくなつたものについてのごとで、幼少のころには、記憶はまことに不確實である。二歳位で盲目になつた子供は、色についても、形についても、全く記憶がないのである。三歳以後でも、記憶は、なか／＼正確ではないのである。

特に、記憶妄錯といふことが多い。これは、未だ經驗せざる事柄を、既に經驗したるごとく考へることである。これは、大人にもよくあることで、實際は初めて來た所であるのに、どうも一度來たことがあるところだと思ひこむ如きはこれである。子供には實にこれが澤山ある。したがつて、その供述にまぢがひのおこることをまぬかれない。

(四) 眞實に知覺したること、その際附け加へたことを混同しやすいといふこと——例へば、此處に一箇の水さしを見たとする、金魚でもはいつてゐればさぞよいだらうと思つてゐると、今度、他人から、その水さしのことを聞かれると、「金魚がはいつてゐ

たやうだ」といふ。これは、實際とこれにつけ加へた想像との區別がつかなくなるので、幼兒には、このために供述の間違ふことがなか／＼多いのである。想像と事實の區別のつきかねることが、更にすゝんで、特に幼兒には、夢と事實とを混同することさへある。夜中に子供が、急に起き上つて、泣き出す。どうしたときくと、「たしかに今持つてゐた玩具がない。」といふ。よく調べて見ると、夢に見てゐたのを、事實と思つてしまふのである。このことは、原始人、野蠻人に著しいことである。かの神話とか傳説とかいふものもそのあるものは。部落の酋長などが、夢に見たことを事實とまぜて話したことを、その話し手が皆から貴まれてゐるといふことで尊重せられ、次々にかたりつたへられたと思はれるものがある。

(五) 子供が、ものを考へることが周密でないため——子供は實に吞氣であつて、大ざつばにものを考へる。そのために、供述のあやまりが多い、例へば日曜日知人を訪問する。門まで行かないうちに、その家の子供にあふ、「いつも、日曜日に釣りに出かける人だから、今日も出かけたかしらん」と思つ

て、その子に「お父さんは、今日も釣りにいらしたか」ときくと、子供は「え、いらしたよ」といふ、翌日その人にきいて見ると、「なあに一日在宅してゐた」といふ。子供は誠に呑氣で、一寸考へれば、わかるのを、うつかりいつてしまふのである。

(六)前のこと、關聯したことであるが、子供は言葉が不充分のために、思ふことをそのままにあらはすことが出来ない。肯定か否定の二つしか、よくいへない、その中間のいろ／＼言辭を弄するといふ様なことはなかく／＼むづかしい。これが、また供述にあやまりの多い原因となるのである。知つてゐる言葉の数が少ないので、細かくいひあらはすといふことが出来ない。

(七)暗示をうけやすきため——元來、暗示といふことは、催眠術などで用ひられるのであるが、それ以外に、ヒント(Hint)を與へるといふと同じ意味で用ひらるゝことが多い。つまり、暗示を與へるとは觀念を與へるといふことである。暗示をうけやすいといへば、即ち觀念を與へられやすいといふやうに考へてよいと思ふ。米國のギルバートは、暗示板(Suggestion blocks)なるものを工夫して、暗示につ

いての研究をしてゐるのである。これは、圓筒狀の長さ一寸位のものでその大きがいろ／＼ある。内部には鉛の粉をつめて置く。これの種々の重さのものをならべて、また別に高さは同じであるが、一つはごく小さいもので、目方は五五瓦、今一つは、太くて、しかし鉛は入らず、目方はやはり五五瓦のもの、先づ小さい方をもつて、これと同じ重さのものを前の方の多くの中からとらせる。次に大きい方で同じ様にする。そして、これを比べて見ると、小さい方のはどうしても重く感ぜられる故に、五五瓦よりも重いのを同じ重さとしてとつて居り、大きい方のは實際よりもかるいと思はれるので、五五瓦より軽いのをとる。そこで例へば小さい方の圓筒について七〇瓦のを同量としてとつたとし、大きい方のに對して四〇瓦のを同量としてとつたとすれば、この差三〇瓦は、ギルバートの考へではその人の被暗示性になるといふので、この差が多ければ多いほど、被暗示性にとむわけである。實驗の結果によれば、幼少年もこのほどこれにとんで居る。又、男女を比べて見ればどうしても、女子の方が暗示されやすいのである。嘗つて供述のことを研究したウイリアム、ステルン

氏は、多くの學校兒童について調査したのであるが、氏の報告によれば、七歳の時には五〇%の影響をうけるのが十四歳になれば一五%位になるといつて居る。また、教育あるものと否らざるものとを比較すれば、前者は五%なるに後者は二五%の影響をうける。男女兒童は大體同じであるけれども、十一歳の時には、女兒が三三%、男兒は二〇%であるといふことである。これによつて見ても、女の方が被暗示性にとむといふことはいへようかと思ふ。迷信上のこと、手品じみたことに迷はされやすいのは、子供で、婦人も随分この仲間にはいることが多いのではなからうか。

(八)子供には責任感がよわいため——子供は自分のしたこと、言つたことに責任をもたない、他人の迷惑を考へることをしない。それ故、その供述にもなか／＼間違ひがあつて、しかも平氣である。それ故、十八歳迄は刑法に訴へずに、感化院で收容するといふのもこのためである。責任感のないものを監獄に投ずることは出来ない。近頃、我國でも、少年裁判のことがやかましく論せられてゐるのもこのためである。

○この誤りを如何にすべきか

以上、兒童の供述にあやまりあること、その原因にさかのばれば、これ實に止むを得ぬことで、故意悪意の嘘言とはことなることは明らかである。けれども、これを實際上、如何にすべきかといふことになると、また、一考を要する。即ち幼少のころはその發達不充分のために、あやまつた供述をするとしても、これが習慣になるといふことは恐ろしいことである。それ故に、實際問題としては、教育上之を如何に取扱ふべきかといふことを、一言しておきたいのである。即ち

(一)出来るだけ觀察を精密にする習慣を與へること、また、知覺及記憶を確實にするようにつとめること、想像と實際との區別を明らかにすること、思考の周密をはかり、輕々しき判斷をさせぬように習慣をつけることが大切である。又出来るだけ子供自身に暗示をうけやすいといふことを承知するようにしたい。又嚴密にいへば、十四歳以下の子供には責任感といふものは與へられないのであるけれども、即ち德育の方面——權威により、模倣により、習慣

によつて——から、なるべく道徳的行爲の形式にな
づませたい。本當の責任感は、青年期にならなけれ
ば出来るものではないけれども、せめてその形をつ
くつておけば、責任感といふ魂はあとから、その時
期の到來と、もに入ることが出来るといふわけであ
る。

(二)上にのべたのは、消極的方法ともいふべきも
のであるが、積極的方法としては、追想の教育をする
ようにしたい。これは日常、學校や家庭で、よくや
つておることで、例へば遠足をするときと、あとからその
感想をかゝせるときか、また幼ない子ならば、見て來
たものを話させる。この際になるべくその經驗した
ことを確實に追想させるようにする。

(二)嘘言をつかせない、不確實なことは一切は
せないような習慣をつけることが大切で、一寸、オ
子風の子供はよく面白さうに出鱈目の供述をする。
それを大人が面白がつてきく、そのために、つひに
は嘘言と意識しつゝ言ふようになり、周圍が子供の
嘘言を助長させる如きことがあつてはならない、こ
れは大人自分が充分に己れを慎んで範をしめすよう
にしなければならぬ。(未校閱……文責筆者)

○フローレンス・ナイチンゲールに捧ぐる歌

……近著のアウトトルック誌より……

(一九二〇年五月十二日、鶯嬢第百回誕生日の紀念
に際して)

(I)私は見た……

數哩に亙つて呻吟せる病牀を。

白耳義からスクタリーに到るまで——

到るところに傷つきなやめる兵士等を。

(2)野戦病院の室々、懊惱のただなかに、

夜となく晝となくゆらめきし一つの光明、

その光こそ鶯嬢の絶えず携へしランプのそ

れのごと。

(3)病兵のツブやきは、ハタと止り、その叫びは静

まりぬ。

やさしき仁義の力が、道をおしわけて進み

しごごとく、

效驗著き祈禱の捧げられしごごとく。

(4)かくて、嬢のかゝげしランプは、今も尙輝き互る

限り知れぬ病室の壁に慰めの影を宿しつゝ——

嬢のはぐくみし看護婦は今なほ其處に行き

かひつ。

(ジョン、フィンレー)

楽しい思ひ出

茨城縣石岡町 私立愛友幼稚園

五月二十日は、待ちにまちたる日であつた。近來稀れる快晴で、緑葉は、木々の梢に、野に、山に目の醒る様なうるはしさである。空高く雲雀囀り、我等幼年の一行を歓迎するのである。スマレ、タンポは路傍のデコレーションとなつて居る。今日は生れ落ちて以來父母の手を離れて一里餘と云ふ大遠距離(幼稚園児に取ては)の大遠足である。午前九時會合と告げたのに七時を打つか打たぬに我後れじと勇みたち、握飯を腰に結び集い來つた。八時には早や揃ひ終つた。簡單に禮拜式をなし、松の組、梅の組竹の組と、各々受持保姆に導かれ、各組合に自由行動を取る事にして、幼稚園を出發したのは九時十五分前であつた。途は平坦で、草履途である。行々タンポ、スマレを摘みてはタンポの歌を唄ひ、雲雀の囀るを聞きては雲雀に合唱し、一同喜々として進んだ。千里の途も一步よりとある如く、一里強の途も

知らぬ間に早や七分通りを歩み來つた。梅の組の内には二三足の重き者あるを發見した保姆は、兼て用意のキヤラメルを取り出し、さあ皆さん一休み、まあアメでもめしあがれと路傍の芝の上に腰を掛けた。そこで「皆様は、大層強い足を神様から頂きました。たれかくたびれた人がありますか。」と問へば、「先生くたびれませんか」と一人が云へば、一同和して「先生くたびれませんか」と、それはつよい、もう高濱はすぐそこで話すうちに、先生出かけましたよと早や立上りて、歩み出すあり、走り出すあり、さあ出發と歩み出すと間もなく先生蒸氣が見へますと先發隊の報告するあり、汽車が見へます、海が見へますと、各自に觸るゝ者は忽ち言葉となりて出づ、一同はにわかに勞れを忘れたる如く駆け出したり。十時二十分高濱町小倉氏宅に歡迎せられ、其處に休息辨當を喫し茶菓の接待を受け、正午十分小倉氏宅

を辭し、町中の散歩をなす。一週間前當地に移轉せし園児の家を訪問す。同家には早朝より我等一行の來訪を待受けありしとの事、其處にも茶菓の接待を受け、午後一時半同家を辭し、高濱停車場に向ふ、待つ事約一時間、二時四十分下り列車に乘車す。汽車に乗るのは彼等に取りて、又新しき經驗なりき。あれ電信柱が走る、山が走る、鳥が走る、手を拍ちて喜べり。間もなく石岡くま車掌の聲に、「さあ下車です御用意」と、云へば、「もう少し乗りたいわ」、「僕も乗りたい」と、「又今度乗せて上げます」と云ひ聞かせ一行三十人を無事に下車せしめホームに來れば其れぞれ出迎者に園児を渡し、幸に落伍者なくけがなく此の遠足をなせし事を心の中に感謝しつゝ、各自の家に歸り此の一日を清く樂しく有益に費したることを喜ぶ。

兒童の爲めに遊び場の選定

住宅と工場の擴大につれ
遊戯場所は逐年縮小さる

— 兒童校外取締會の建議 —

都市の發展につれ住宅、工場等の地域擴大せる結果幼児兒童の遊

戲場所は逐年狭小にされ身體の發育を妨げられ或は其からぬ場所に遊び不長少年化する有様である東京市兒童校外取締會が最近調査した處によると兒童の娛樂的集合所は

- (一) 小學校附近の文具店——營業競争上景品を附け或は貸賣をなして歡心を得浪費の惡風を助長してある——(二) 駄菓子屋——衛生上有害なる飲食物を販賣し或は賭博的遊戲をなさしむる者あり——(三) 見世物、屋臺店附近——卑猥なる言語動作を以て兒童の歡心を得んとする者又は衛生上有害の飲食物を販賣する者あり——(四) 綠日商店附近——不長少年と接觸し種々惡戯をなし甚きに至つては商品を掠むる者あり且つ深更に及び衛生上有害あり——(五) 各種の興行場附近——(六) 各所にある空地——以上大したる害なし——(七) 遊路並に建築工事中の場所——工事妨害且危險あり——(八) 河岸地——作業妨害且つ危險——(九) 材木砂利等の置場——危險——(十) 路次又は拔裏——往來妨害並に賭博的遊戲をなす者あり——(十一) 社寺境内及び公園——惡戯、賭物、物品、樹木等を毀損、或は落書し殊に不長兒童會場となつてゐる——(十二) 夏季水泳場——風儀紊亂飲食費濫費——(十三) 堤防——危險
- 等孰も兒童の遊戯場は兩親が安堵する事の出來ない状態にあるので市兒童校外取締會にては各區にある小公園の増設改善を去二十四日市児市長に建議する事となつた即ち
- ▼公園を増設せられたき事 (一) 現在の公園の地積を擴張する事 (二) 各區の面積及住居せる幼児兒童數に比して適當なる地積を有する公園を増設する事 (三) 公園設置の場合には兒童の集合し易き地を選択する事 (四) 公園内に左の區劃を立て適當なる指導と其年齢趣味に合致せる運動用具其他の設備をなす事 (イ) 幼児と母 (ロ) 小學校兒童 (ハ) 青年男子 (ニ) 青年女子 (三) 鳥獸水魚の飼養場を設け公園内に入りたるもの、快感を起すべき設備に注意する事 ▼遊戯場を設置せられたき事 (一) 幼児兒童専用遊戯場を公園内又は他の適當なる場所に設置する事 (二) 指導者を置き誘導と獎勵とを圖る事 (三) 指導者の資格 (イ) 幼児——保姆 (ロ) 小學兒童小學教員將來増設せらるゝに従ひ指導者養成機關を設置する事

嵯峨行ききの記

——六月十一日——

幼児數 七十三名 嫗姆 六名 校長

嵯峨行きも前から問題になつて居たけれども、まだ、幼兒のなれないため、實行しかねて居たのであつた。大分歩行も出來電車の上り下りも練習が出來たので愈々行くことにした。豫定の日は來た。好天氣で都合よし、八時半出門する豫刻であつたが、來ぬ兒を待ち合せたり、辨當やお菓子の袋などを、背に負はせたり、腰に下げたり、はき物を調べたり、便所へ行かせたり種々の注意をして居るうちに九時になつて出門した。

嵐山電車場迄では凡そ十町餘もあるのを徒歩せしめ割合に早く三十分位で行き著いた、直ちに電車に乗ることが出來た。例の如く、半は腰掛の上に立たしめ半を腰掛けしめて保姆や附添の者は中央に立つた。此の電車は貸切が許されないので他の乗客も七

京都日彰幼稚園

八人のつて居たために、可なり窮屈であつた。「頭を出してはいけない」の、「手を出してはなりません」の「風に帽子をとられぬ様」その注意が度々あつたが、すぐに忘れるので困つた。腰掛けして居る子供はおとなしく目的地に著くのを待つた居るが、立つて車外を見て居るものは中々やかましい、一寸のものも見のがすまいとお互におしやべりしてゐる。重り合ふ西の山々は綠濃く、間近に見えて圓満な形はゆつたりと心に感じる、畑は若苗ばかりで所々に麥が黄ろく見ゆるばかりである。壬生、三條口、兩院、蚕の社、太子前、嵯峨、嵐山の順で目的地に到達した丁度三十分かゝつた。他の遊覽者は實に少ないもので、園兒の嵐山と云つていゝ位静かであつた。白いエプロンのお揃をかけた可愛い兒等が列をそろへて軽い足どりで松並木の間を行くのがどんなにふさはしいものであつたらう。新緑の蔭、若葉の匂、身に

快よい氣温、實に萌え出づる初夏ほど心よいものはないと思つた。幼兒等も其の快さに氣もそるよろこび勇んで歩む渡月橋にかゝる、橋上より左右を眺めて雑談一しきり、「彼の山に上るのですか」、「彼の舟に乗せてくれはるのどすか」とか、「魚がたんと居る」の「魚つりしていやはる私らもつり度いな」とか氣の早い兒は、「どこでお辨當食べるのです」なんて心配して居るものもある。かくして暫、橋を渡つて左へ行く。中之島公園と云ふ、共同休憩所にて持參の包などを下らしめた時は十時一寸過ぎだつた。汗ばんだ顔を拭はしたり、便所へ行かしたりして、暫休憩せしめて後又列をそろへて虚空藏さんへ行く。中の島公園を出て左へ坂道を一町、石段を右へ上れば本堂へ達す。十三まわりには必ずこゝへおまわりして智慧をもらう習慣になつてゐるので、皆かしこくなるやうにと禮拜した。左手の森の中をあさり歩くもの、日露戰の記念碑の所へ上つたり降りたりするもの、大砲をおもちやにするもの、思ひ思ひに遊んで小半時過ぎた。横道より下りて元の公園へ歸つて休憩した。時に十一時であつた。「お菓子を食べても宜しいか」なんて尋ねてゐる兒もある。一人が言

ふどあつちからもこつちからも聞えて來る、それで、もうちぎごほんですから少しだけ食べておくことを言つてやつたら、皆「うれし〜」と各々の袋から出して食べ始めた。その中にお茶もわいて用意が出來たから、お辨當を開くことにした。其のよろこびは何にたとへんやうもない。やつぱり食べることより以上にうれしい事はないものゝ様である。一間の腰掛を六七部に分けて坐する者、腰をかけるもの、それ／＼席が定まる。一人辨當が無いと云つて半泣きになつてゐる。それは來る道で保姆がおすしづめの折を拾つて持つて居つた。「これは誰のですか」と度々きいても誰もどりに來なかつたから、「他の遊客のかしら」と言ひ合つてゐたのであつた。背に負つてゐたのがすりぬけてゐるのを知らずに居たので大笑だつた。一通り皆の辨當をあらため見た。大抵は日々用ひて居る辨當箱に日常とかはらぬやうにしてある者が多かつた。特に遠足だからと心づくしのおあつらへの折もあつたが、季節柄らとておすし等は上の魚類にあやしいと思ふものがあつたから、それは取りのけて食べるやうにしてやつた。「おあがりなさい」「いただきます」の挨拶あつて、よろこびに満ち

た顔つきで食し始めた。食後お茶がよく飲まれた。廣い場所ので三々五々むつまふて何をするとはなしに遊ぶ。或は魚つりを見たり、川へ石を投げて遠くへやりつこをして居るもの、螢をさがしてゐるものもあつた。常においたの大將は、はや川岸へと下りて行つて水を掬つて居た。ならうことなら、皆を川へ下ろして、彼の小魚をすくはしてやつたらどんなによろこぶことかと思つたことであつた。螢を二三匹づゝもつかまへて紙につゝんで居たものも數人あつた。一時間半遊んだ。こんどは龜山公園から天龍寺へ行くことにした。笛をふくと八方から集つて來て身仕度も人手をからず、すばやく出來上り、受持ち保母が直立すると其前にすつと列を作す心うれし。もと來た渡月橋を渡りて左へ約二丁で龜山公園に著く。小高き山をなす所へ上るに一寸ゑらいからとて、赤組だけは下の川添を行くことにして、青と緑の組とが上ることになつた。勇氣倍増して、一段二段と上つた。丁度下を見ると赤組の兒が下に見えたので「赤組さん萬歲」の連呼があつた。ずんぐ／＼進んで行くのを止めて「もうこゝら迄でにして置きませう」といつて、切かぶや、ペンチに腰をかけて話した。

こゝは赤い松の木が高く、すうつ／＼と立ち竝んでゐて壯快な感じがする。下を見ると、千鳥が淵である、西にかたむく太陽が向ふの山の若葉のすき間を通じて綠色なす水におちて銀の砂子をまいたやうにきら／＼きらと小波にかゝやいて居る。勇ましいかけ聲をそへてボートを漕いで通る竿さす舟も見える。幼兒はぢきに「ボートを漕ぎませう」と歌ふ、木梢にないて居る春蟬の音を聞いては、「夏が來たか」と歌ひ出す。如何に此の美しい大きな自然がこの美しい天真爛漫の子等を抱擁して居るかを思はず居られなかつた。山を下りて來て天龍寺に向ふ。赤組は先きに來て待つて居る。又萬歲をかたみに言ひ交してゐる。何でも萬歲が挨拶の代用となるのである。

天井の龍の畫を見ておどろく。境内には何所かの小學校の生徒が多く來て休憩してゐた。こゝを辭して門を出て左して約二丁、電車は丁度空であつたので走り乗つた。他の乗客は二三人しかなかつた。電車が動き出すと暫くして、コクリコクリと居眠を始めるものが多い。搖籃の心持であらう。グツスリ寝込んでしまつて體は右に左にくの字になつてゐる。上に立つて居るも、中に立ちながらフラ／＼と今にも倒れさうになつてゐるものもある。其の罪のなき又な可愛いかつた。程なく京都についた。眠を覺まされて目をこすりこすり下りる様が可愛想にも思はれた。餘り疲勞していけないと云つて電車で歸ることにした。歸り着いたのは丁度豫定の三時であつた湯呑場へ入りてのどなるほさこめて人員を調べた。皆さん大變強かつたでして歸つたら體中をすつかりふいておもらひなさい」と注意して「さよなら」の挨拶で別れた。

あるがまゝの世界を、あるがまゝに見て行くことが出来れば、私達は不平をいふことはないだらう。かくあるべきものだ」と此方からきめてかゝるから、それにあはないと不平にもなり、氣もいらだつ。さまざまの個人性をもつ子供等と生活してゐる時に、彼等を自分の思ふ型にはめようと思ふまへに先づ彼等の個人性におどろきたいと思ふ。私達は、児童心理の本をよんだり、研究をつんだりして、子供はかく取扱ふべきものといふ尺度をつくる。しかしその尺度は、完全なものとは誰がいふことが出来るだらうか。子供の生活そのものが事實である。この事實を措いて児童心理の研究も指導の方法もない。いつも謙遜な心持で、心眼をしばいに開いて、如何なる驚くべき事實が彼等の生活のうちにあるかを見たい。受取つて行きたい。昔話にあるプロクリステスの寢床の様に、自分の考へのうちにないやうな子供の性質は、おしげもなく之をすて願みず、自分のもつてゐる窮屈な尺度にたらないところがあると、こんな筈はない、かくあらねばならぬと、——子供一人一人には無比な生活そのものがあることもわすれて——之を子供に強いて大に教育の効果をあげるつもりでゐるやうなことがありやすい。何故私達は、もつと、ゆつたりとした心持で事實の中に生きてゆけないのだらう。きこらない心で、いつも教育者といふいかめしい鎧に身をかためて子供に對さなければならぬのだらうか。私達がいづも人間らしく生きたいといふねがひにあふれて、その心そのまゝに子供にぶつかつて行くことが出来れば、如何に彼等が私達よりはるかに、人間らしく眞實に生きてゐるかといふことに驚くに相違ない。また、よし、好ましくない癖の子があつたとしても「いやな子だ」と批判するまへに、「この子は何にもしらずに生れて來たのに、わづか三年四年この世にある中にかくなつたのだ」といふ憂ふる心持でその子を包擁することが出来ればどんなによいだらう。私達は善いといひ、悪いといつて、すぐに篩にかけてしまはずに、何處までも、事實に忠實にぶつかつて行くのでなければいけない。主觀的の立場から見に行けば、子供の生はそこなはれる事も多からう。私達は眞實に生きたい。事實をどうなほさうとあせる

まへに、自分が何處迄忠實に事實を見てゐるかを考へたい。

月光の美しき夜、橋上に立つて、漣にくだける月影をみつめてゐる時、そのうづまく水の姿が刻々に變つてゐるにおどろく。海濱の砂上に坐して、旭光の美しさに見とれてゐる時、岸によせてはかへす波の姿、映する光のさまざまなおもむきにしみる瞬間の貴さといふ事を思ふ。「その瞬間が貴いのだ、またさくりかへされないその瞬間が。」と叫ばざるを得ない。

子供の生活を、ちつと見つけてゐると、この再びかへらぬ瞬間に、くりかへしをゆるさない真劍の生活をしてゐるその貴さを感じる。繪かきと同じ繪を二枚かいてくれといへば迷惑には相違ないがかいてくれる、しかし子供に「今の繪がお上手であつたから、この通りもう一枚。」とたのんでも、決して同じものはかけない。子供はたつた一度、たゞ一つのものに我の全體をうちこんで生活する。くりかへしは出来ない。よし、私達の眼には、幾日も同じことをして遊んでゐると思はれても、遊んでゐる子供自身は、決してくりかへしの生活ぢやない、隨性の生活ぢやない、刻々に新しい心で生きてゐる。私達は、瞬間を尊重しなければいけない。子供等は、昨日にも、明日にも生きない。今日に、今に生きる、此處に生きる、回顧とか豫想とかいふものはない。彼等はたゞ現在に生きるだけでもすることが澤山でやりきれないのである。

私達は、雨がふるといつてはつぶやく、風が吹くといつては愚痴をこぼす。けれども、子供等は、大自然のいろ／＼の現象を驚嘆の眼をひらいてうけとつてゐる。雨だれの音にあはせて歌をうたひ、水たまりにうつる自分の姿に話しかけては、打興じてゐる彼等の顔、風にとばされる木の葉を、自分が鬼ごつこの鬼になつたつもりで追ひかけまはし、うづまいてさぶ紙片を鳥とおもつてか息を凝してみつめてゐる子供の姿、實際彼等は、何がおこつてもつぶやく事をしらないで、たゞびつくりして見つめてゐる。此處にこそ眞實がある。感激の瞬間は誰でも偉人であるといふ言葉のやうに、子供といふこの偉人に對して、私達も彼等とくもに刻々に生き、その各瞬間を感激する。否、彼等が如何に真劍に生きてゐるかに感激することが出来るであらう。私達は、さぞ、毎日を生々どつかれることも、厭きることもなく彼等のうちに過すことが出来るであらう。

ホタルコイコイ

ニ調 2 4	1	3.	3	5.	5	3.	5	6.	6	1̇.	6	5.	0	
	ホ	タ	ル	コ	イ	コ	イ	ト	ン	デ	コ	イ		
	ほ	た	る	こ	い	こ	い	と	ん	で	こ	い		
	3.	3	3.	3	5.	5	3.	2	1.	2	3.	2	1.	0
	ウ	チ	ハ	ヲ	ア	ゲ	タ	ラ	ト	ン	デ	コ	イ	
	い	ー	へ	は	き	れ	い	な	ほ	た	る	か	ご	
	5.	5	5.	5	3.	3	5.	5	6.	6	1̇.	6	5.	0
	サ	ー	サ	ヲ	フ	ツ	タ	ラ	ト	ン	デ	コ	イ	
	ご	ち	そ	う	し	ま	せ	う	く	さ	の	つ	ゆ	
	1̇	5.	5	6.	6	5.	5	3.	3	2.	2	1.	0	
	キ	タ	ラ	ダ	イ	ヂ	ニ	シ	テ	ア	ゲ	ヨ	ウ	
	び	か	び	か	び	か	ご	ひ	を	ご	も	せ		

表情遊戯

土川五郎

ホタルコイコイ

作歌 景浦直考

作曲 永井幸次氏

(大阪開成館唱歌幼稚園)

ゴ	二、	一、
ピカ	ホタル	ホタル
ビカ	タル	タル
ビカ	コイ	コイ
ピカ	コイ	コイ
ト	イト	イト
ヒ	ン	ン
ヲ	デ	デ
ト	コ	コ
モ	イ	イ
セ	ヨ	ヨ
	ウ	ウ

ホタル 右足一步斜右に左足の踵を上ぐ、兩手を斜右に充分に伸ばす(掌を下に向け)。

コイコイ 兩手にて招く如くすること二回此時遙か向ふを見る。

トンデ 左足一步斜左に右足の踵を上ぐ。兩手を斜左に充分に伸ばす。

コイ 兩手にて招くこと前に同じく二回。

ウチワヲ 左足を右足に引きつけ、右手を斜右に

上ぐ(掌を空に向く)左手は左側稍々後方に伸ばし上體を少しく右方に傾く。

アゲタラ 左手にて同じ動作をなす。

トンデ 兩手を體前(目より少しく高く)中央にて指先を合せ更に之れを左右に開きて又中央に持來す。

コイ 兩手にて招く如くすること一回。

ササヲフツタラ 兩手を頭上にあげ掌を相對し之れを左右にふること四回。

トンデコイ 兩手を少しく左右に開き羽ばたきしつゝ右より一回回轉す。

キタラ 兩手を左右より頭上に伸ばし兩足の踵をあげ兩掌を勢よく合せ螢を捕ふる様をなす。

ダイジニ 兩膝を少しく屈し兩手(螢を兩掌の間に入れたるまゝ)を胸前に持ち來して膝を伸ばす。

シテアゲヨウ 左より右より交互に螢をのぞき込む如くす。

二、ホタルコイコイ 第一に同じ。

トンデコイ 第一に同じ。

イヘハ 兩手を開掌のまゝ體前顔の高さに持來り更に左右肩の高さに開く。

キレイナ 再び體前に持來り兩掌を肩の幅に向き合はす。

ホタルカゴ 兩手を其儘下にさぐ(肱の直角になるまで)。

ゴチソウ 兩膝を少しく屈し兩手を揃へ掌を上にし左下に下げ。

シマセウ 體前に持來す。

クサノツユ 右下にさげて露を與ふる如くす。

ピカ 前方斜兩側に少しく高く手を開く。

ピカ 肱を屈す。

ピカト 又兩腕を伸ばし掌を開く。

ヒラ 山形に體前にて左右に開く。

トモ もとに戻し更に側方よりすくひあぐ。

セ 拍手一回。

桃太郎

桃から生れた桃太郎

氣はやさしくて力持ち

鬼が島をば撃たんとて

勇んで家を出掛けたり

日本一の黍團子

なさけにつき来る犬と猿

雉子も貰ふてお伴する

いそげもの共おくるなよ

はげしいいくさに大勝利

鬼が島をば攻め伏せて

こつた寶は何々ぞ

金銀さんごあや錦

車につんだ寶もの

犬が曳き出すゑんやらや

猿があと押すゑんやらや

雉子が綱ひくるゑんやらや

準備 此の歌の感じを抱かしむるには一同を圓形に

内面に向き蹲踞せしめ兩手を左右側より頭上に指

先を合せ自分が桃の中に這入つて居る。即ち「さ

あ皆さんは桃太郎さんですよ、桃の中に這入つて

ゐらつしやい」かく取扱ふ。

桃から 此の間沈黙。
生れた 兩手を左右に開きて兩側に下ぐる時直立

す。

桃太郎 左足僅かに左へ右足を僅かに右に開く

氣はやさしくて 右掌にて胸を撫で(大きく)下ろし

次に左掌にて同様になす。

力持ち 左手の拳を握り前に出し右手の拳にて左腕

を打ち、次に右手を出し左手にて打つ。

鬼が島をば 右手食指を出し右側斜上を指す。

うたんとて 右手を一振り振ると同時に右向をなす

勇んで家を出掛けたり 行進す。

日本一の黍團子 兩手の拇指と食指にて丸を作り

他指を開き兩側後方より上へ大きく頭上へ上ぐ。

なさけにつきくる犬と猿 行進す。
雉子も 立ち留まり兩手を胸前に取る(掌を上)、
貰うて 禮をなす。

お伴する 兩手を下ろし行進す。

いそげもの共おくるなよ 前の歌の止みたる時右足
前左足後の姿勢にて其まゝ上體を左へ廻し、後ろ
を向き右手にて臣を招く。

はげしいいくさに 兩手共に握り左下右上に胸前に
持ち來り(恰も刀の柄を握れる如く)左足より踏み
入れ四歩(圓心に向つて)前進す。此時刀を握りた
る兩手を高くすることなく斜右上より斜左下へ次
に斜左上より斜右下へ(擊劍の打ち込みの型の如
く)行進すると共に動かす。

大勝利 兩手を真直に上にあぐ。

鬼が鳥をは 右足を一步引き兩手を兩側後方より大
きく上にあぐ。

せめ伏せて 上體を前へ屈すると同時に兩手を前へ
(掌を下に)。

取つた寶は何々ぞ 右手を前に伸ばして握りて引く

次に左手にて同じ動作をなす、後退しつゝ左右交

互に此の動作をなすこと四回。

金銀さんごあやしき 右食指にて體前左より指す

こと四回。

車につんだ寶物 右足稍々右へ開き兩手をそろへ

(掌を上) 右下方より左にある車へのせる如く、

(此時右下方に手のある時は兩膝を稍々屈し左へ
送る時のばす)すること二回。

犬が曳き出すゑんやらや 車を曳く如く兩手を軽く
握りて胸側下方に置き左足前に上體を稍々左前方
に次に右足前に上體を稍々右前方に傾け(重きを
曳く如く力をこめて)四歩前進。

猿があごおすゑんやらや 兩手掌を前方に向け左足
を出す時(上體と共に稍々左方に)突き出し右足を
出す時出したる手を引きて又突き出すかくする事
四回即ち四歩前進す。

雉子が綱ひくゑんやらや 右肩に綱をかけ右手にて
曳く如くして前進すること八歩。

◎人を求む

○このごろ家庭に住みこみの保母を要する向が二三
ございます。御希望の方は本會あてに履歷書をそ
へて御申出し下さい。

水 鐵 砲

水を澤山くんで来て

水鐵砲で遊びませう

一、二、三、四、シユツ／＼シユツ

鳩

ぼっぼっぼ 鳩ぼっぼ

豆がほしいか そらやるぞ

みんなでなかよくとんで来い

ぼっぼっぼ 鳩ぼっぼ

豆がうまいか たべたなら

一度にそろつて飛んで行け

水 鐵 砲

圓心に向く

水を澤山汲んできて 兩手を揃へ水をすくふ如き手

振にて體を前方に傾け、左方へ水を汲み入れる如くすること四回。

水鐵砲で 兩手を握り左手は甲を下に右手は甲を上

に體前にて水鐵砲を持ちたる如くして、上下に動かして、四歩前進す。

遊びませう 同じく四歩後退す。

一三四 左足一步前にし水鐵砲を持ちたる手つき

にて上體を前方に屈し、左手を下に伸ばし右手にて水を汲上げる如く突いては引き突いては引くこと四回。

しゆつしゆつしゆつ 體を起し左手を伸ばし上方を

向き右手にて(左右手共に握る)水を突き出す如くすること三回。

鳩

ぼっぼ 兩手を左右に掌を下にして開き左足を左へ

一步(少しく膝を屈す)直ちに右足を左足につく(膝を伸ばす)

ぼ 前と同じ動作を右方に行ふ。

鳩ぼ 左方に同じくす。

ぼ 右方に同じくす。

豆がほしいかそらやるぞ 左手に豆を受け右手にて

それを取りては投げる如くして右方より一回轉す

みんなで仲善く 全體手を取りて四歩前進す。

こんでこい 右手にて鳩を招きつゝ四歩後退す(此時手は體前や下方にて招く)。

ぼっぼっぼ 前に同じ。

鳩ぼっぼ 前に同じ。

豆がうまいかたべたなら 前に同じく鳩に豆を與ふる如くす。

一度に揃つて飛んでゆけ 全體右向きをなし左右手を伸ばし上下に動かして、前進し終に内方に向く

○幼稚園に關する文部省夏期講習會

に つ い て

前號に大體豫告して置きましたが、今夏、開催せらるべき幼稚園に關する、文部省夏期講習會は、去る六月十九日の官報に詳しく發表されました。期間は七月二十六日より八月四日迄講師ならびに講習科目の内容は大體次の通りです

東京女高師教授 菅 原 教 造

一、兒童の繪畫 (八時間)

一、本能と智能 一、中樞神經と交感神經

二、文化階段と精神生活 一、論理以前の精神

三、性慾宗教科藝術の原始的關係 一、鑑賞と

創作 一、本能と藝術 一、藝術慾と藝術能

一、表現の要求と心像の象徴化 一、原型とし

ての強緩及廢頰 一、原型としての眞實及素朴

東京女高師講師 青 木 醇

一、保育衛生 (十四時間)

一、小兒身體の特徵と其發育

二、幼兒の養護

幼兒と食物、空氣と日光、衣服、居室、清潔、戶外遊戯、休息と睡眠、齒牙の保護、幼稚園衛生

三、幼兒と體質

四、幼兒と傳染病 其他幼兒に特有なる疾病

五、健康小兒と病兒の觀察

六、病兒の介抱と應急の處置

東京女高師講師 藤 五 代 策

一、玩 具

甲、理論 (五時間)

一、歐米に於ける玩具界の大要

二、我國に於ける玩具の發達

三、玩具の教育的價値

四、幼稚園的玩具の選擇

五、玩具使用上の注意

乙、玩具製作 (十五時間)

一、活動玩具

蝶、蜻蛉、金魚、鯉、水鳥、犬、兔、豚、牛

象、鶴と狐、變り人形、桃と桃太郎、體操人

形、米搗、木挽、卵達磨、踊る繭、反動獨樂

不思議な鼓、舟、動船等

二、竹笛類

雲雀笛、蟬笛、鷄笛、鶯笛、蛙笛、猫笛、牛笛等

三、提ケ籃類

櫛子籃、市松籃、網代籃、龜甲籃

(注意 講習員は次の工具及材料を要す)

一、工具……切出小刀、木鋸、コンパス、小形鋸、鼠齒鋸
針、一尺指、繪具皿、繪具筆(以上を東京にて新調すれば約一圓六十錢を要す)。

(二)材料——羅紗紙、ホール紙、麥稈、絲、粘土、木片、
女竹、糊、繪具(以上約一圓五十錢を要す)。

以上

○日本幼稚園協會夏期講習會

前號豫告の通り本會は、文部省講習會に御出席の方々の御便宜を計り、特に土川五郎氏を聘して來る七月二十六日より八月二日迄、毎日午後一時より表情遊戯及律動遊戯の講習を致します。多數御出席下さることを希望致します。

因に、今年に單に律動遊戯のみでなしに、表情遊戯も教へて下さることになつてゐます。これは在來の桃太郎、金太郎などを、單に表象的のものでなしに筋肉を大きくうごかす、またリズムにかなつた様にと、土川先生が多年御研鑽になつたものでありま

す。

その時間割は大體左の通りです。

七月二十六日、二十七日、三十一日、八月二日の四日間
は毎日午後一時より四時迄、八月一日(日曜日)は特に午前八時より十一時迄。

日本幼稚園協會主催 慈善音樂會の報告

本會は、現下の時勢に鑑みて託兒所の問題や、其他本會が將に當るべき社會事業に向つて、其の計劃を實行致しますために、先づ必要な基金を得んと、既報のごとく、去る六月十九日午後二時、東京音樂學校大講堂に於て、慈善音樂會を開きました。時恰も諸種の集會や、音樂會と相重なりましたにも拘はらず、幼稚園關係者は申すにおよばず、ひろく家庭の方々や、また官廳の方面まで非常なる同情をよせられ、お蔭をもつて、意外の盛況でありましたことは、會長初め發企人一同、本會關係者の厚く感謝するところであります。これによつて本會は社會の目下の期待に添ひ得る事業の開始に、著手したく、此後とも、一層ひろく、本會の各種事業に對して、各

方面の厚き御同情を切におねがひする次第であります。

當日は、生憎朝からひどい雨でしたが、午後の開會までにはいくらか、小やみなれかしと、念じた甲斐あつてか、開會の少しまへには、薄日がもれかけました。嬉しと思ふ間に、また、しどくどふり出しました。空模様はまことに定まりませんでしたのに、會場はと見れば定刻前十分、すでに各等とも、あます座席もわづかとなつてしまひました。いよいよ開會となるや、來會者はふえるばかり、眞に堂にあふるゝとはこのことで、ひきつゝいての演奏に折角の來會者を席に案内する暇さへなく、中には立つたまゝきいていたゞく様な失禮をしたことはお詫び申上なければなりません。あとで音楽學校の方に伺ひますと、かゝる盛大な會は近頃珍しいとのことでした。如何に本會に對して皆様の御同情の深かつたかを謝するどゝもに、此後本會の事業についても世間の同情を得て、いよゝゝ發展し得る確信を得た次第であります。

左に決算報告の大體を摘録いたします

収入の部

一金貳千參百九拾七圓也

内 譯

一金貳千參百四拾貳圓也

一金五拾五圓也

入場券賣上高
有志寄附

支出の部

一金五百九拾壹圓貳拾六錢也

殘 高

一金壹千八百〇五圓七拾四錢也

以上

子供が、自分の久しく弄んだ玩具や、使ひ慣れた道具を、終に壊したり裂いたり損じたりするのは、もとゝ潜在的發展性によるのであるといふ説がある。が、事實上、好奇心によることが多いやうである。即ち、其物の組立や内部の模様を知りたいといふ慾望から壊すことが往々あるのである。私の知つて居る子供は、花冠の尊についてゐる様子が知りたいと云つて花を轟つたり、羽が翼について居る様子が知りたいと云つて鳥の羽を轟つたりした。博物學者の信ずる所によると、組織結合するよりも破壊分割した方が調査の目的を達するに都合がよいさうである。即ち、活かすよりも殺した方が知るには都合がよいのである。兒童が物を壊すのは咎むべきことではない。(ゲーテ)

少年音楽家 (四)

東京女高師教授 岡田美津

四、二通の手紙

まだ薄暗いうちに民雄は眼を覺ました。第一に感じた事は、堅い牀の上に寝たせいで身體が痺れて關節がギコチない事であつた。

民雄は半分起き直つて、

「父さん、僕はね、夜ぢう、寝てゐたの、あの牀の……」と言ひさして手の甲で眼を摩り、「一寸、父さん、どう……」此處まで言つた時目が覺めきつた。わつと低い聲を立て、彼は跳び起きさま、窓のところへ驅けていつた。樹を越して東の天が紅くなつて居るのが見えた。裏庭には誰も居なかつたが、納屋の戸は開いてゐた。呼吸を一つ深く吸つて、民雄は室内へ向き直り、急いで著物を著換へ出した。ダラリとなつてゐる衣囊の中で金貨が美しい音を立て、チャラン／＼鳴つた。一度などは、五六枚牀

の上に轉げ出した。民雄は、一寸それを落ちたまゝにして置きさうだつたが、やがて焦心つたさうな態度をして拾ひ上げて衣囊の奥へ押し込み、カチャンカチャンいはないやうにハンケチを詰めた。

衣服を著終ると民雄はバイオリンを取り上げて、そつと廊下へ出た。初は、何の音もきこえなかつたが、やがて下の臺所から、早足に歩く音や、鍋皿の音がした。バイオリンを緊と握つて民雄は裏階段から靜に庭に下りていつた。そして瞬く間に、開いてゐる納屋の入口から急ぎ足で、狭い梯子を屋根裏へと登つていつた。

ところが、登りきつたところで彼は低い叫び聲を出して急に立ち停つた。それから背後を振りかへると、親切さうな男が梯子の下から彼を見上げてゐた

「あの……あの……あの人はどこに居るんです。

あの人をどうしてしまつたんです。」と民雄は訴へた
——早く下へ行かうと階段を夢中に駆け下りながら
男の雨風に曝された顔には、心から氣の毒さうな
併し困つたやうな風が見えた。

「あゝ小僧どん。御前がそだな、え」と彼は言ひ悪
さうにいつた。

「え、僕は民雄。あの人はどこ？僕の父さん——置
いていらした部分の父さん——氷の上衣のやう
な、あの部分」と、民雄は咽ぶやうにいつた。

男は眼を丸くした。そして、我知らず退却を始め
た。

「あのな、おらは——おらは——」

「多分、あなたは知らないでせう」と民雄は言葉せ
はしく遮つた。「あなたは昨夕見たんではない。あな
たは誰？もう一人の人は何處に居ます。」

「おら、こゝに居なかつた——最初はよ。」

と男はやはり夢中で退却しながら、急いで話した。

「おらか、おらはな、平藏ツていふんだ。ゆんべの人
は新右衛門さんだ——おらの使はれてゐる人で。」
「それでは、その新右衛門さんは何處に居るんで

す。」と少年は納屋の戸口へ急ぎながら「その人が——
父さんの事を知て居るかもしれない。あ、あそこに
居る？」と民雄は、納屋から走り出て庭を横切つて、
臺所の入口へと向つて行つた。

そこで十分ばかり、彼は厭な思ひをさせられた。
新右衛門の他に、内儀さんも雇男の平藏もそこに居
たが、その人達のいふ事が一向民雄には解らなかつ
た。自分が訊ねる事に満足な返事が得られないし、
また自分としては、いくら返事をして、先方の氣
に入るやうな返事をしないらしく思はれた。

それから、新右衛門夫婦と平藏とは朝飯を食べる
とて臺所へいつた。民雄にも来いと御内儀さんだけ
はいつてくれた。が、民雄は頭を振つて、

「ありがたう。だけど僕は澤山なんです——今は欲し
くありません。」

といつて、入口の段に腰を下ろして考へやうとした。
胸が一杯でとても喉へ通りさうもないのに、御飯な
んか食べられるものかと思つて居た。

民雄は、すつかり心配になつて茫然と途方に暮れ
てゐた。父さんには此世ではもう二度と逢へない
し、その聲もきかれないのだといふ事が解つた。こ

れだけは、今の十分の間にすつかり合點がいつた
しかし、何故さうなのだか又父さんが自分をどうさ
せたいと思つていらしやるのだからはまだ解りかね
た。父さんが去つてしまふといふ事は自分の身にど
う響いて来るのだから今までもちつとも悟らずに居たの
である。しかしどうしたつてさうならせたくないと
懸命に念じた。さうならせなくてはならない……と口
言ひながらも、いやさうなるのだ、さうなるより他
に途はないのだと知つてゐた。

それから、民雄は山の家が戀しくなつて來た。ど
にかくあすこなら、四方に懐かしい森があり、その
中には鳥も居れば栗鼠も居り、頼もしい小川もある
あすこならまだ銀の湖も眺められる。そして何もか
もが父さんの事を語つてくれるだらう。あすこなら
父さんがほんごに一所にゐて下さるやうな氣がする
だらう。もしかして父さんが歸つていらつしやる事
があるとするれば、きつと、二人にとつて懐しいあの小
さな山の家へ來て、自分を御探しなさるだらう。あゝ
歸らうあの小家へ。どうしてもあすこへ歸らう！
と一途に思ひ込んだ様子をして民雄は起ち上り、バ
イオリンを手に取つて、馬車まはしから往來へ、そ

して前夜父と一所に歩いて來た方角を指して足許た
しかに急いで去つた。

新右衛門の宅で丁度朝飯を濟ましたところへ、檢
死掛の銀田が、鳥山といふ村一番の有力な百姓でま
た、うそか真か一番の吝嗇家といふ評判の男と一所
に荷馬車を庭へ乗り入れた。

新右衛門と平藏とが臺所口へ出て來ると、いきな
り銀田が、

「どうだい、子供が何か話したかいと尋ねた。

一向いはねい。役に立ちさうな事は何もいはね
い」と新右衛門が答へた。

「子供はどこに居る」

「つい、今しがたその段のところに居つたが」

と新右衛門は、少し焦つてあたりを見廻した。

「おれは、あの子に逢ひたいんだがな——あの子に
宛てた手紙があるんだ。

「手紙だ！」と新右衛門も平藏も共々驚いて叫んだ
「そうだ——親父の衣囊にあつたんだ。」と銀田は
焦心すやうに態と言葉短かに點頭いて見せた——他
のものが聞きたがつてゐる面白い話の材料を自分は
もつてゐるとばかりに。

「民雄へ」と宛名がしてあるんだから、讀まないで先へあいつに渡した方がよからうと考へたんだ。何しろあの子のだから。何と書いてあるか、も一つの手紙よりは、ちつとまじだかどうだか知りたいて思つてるんだ。」

「も一つのだ。」とまた異口同音に二人は叫んだ。

「あゝ、も一つあるんだ。」と鳥山が手短に述べた。

「おれは讀んだには讀んだんだが、一番終りのめちや／＼の字だけは駄目だった。あれや誰にだつて讀めやしねい。」

銀田は笑ひながら

「全くやりきれねい。降參だ、あの名前には。」と白狀して「ところが、こちらはその名前が知りたいんだ、何といふんだかさ。昨夜御前の話だと、子供は苗字を知らないらしいつていふから、今朝までにはちつと何か知れさうなもんだと實は希望にしてゐたんだ。」

新右衛門は頭を振つて、

「とても駄目だつたんだ。」

「まつたくよ」と平藏が力瘤をいれて、口を出した。

「不思議なんていふところは通り越してら。今、

普通の人間のやうな口きいてゐるかと思ふと、冰でこせいた上衣だ、鳥だ、栗鼠だ、さゝめく小川だつてそんな事をしやべるぢやねいか。きつと、ござつてるんだせ。まあ、きいて下せい、あいつは自分とバイオロンと同じもんだと思つてるらしいんで。今朝もな、あいつに何が出来るつてきいたんだ。何がしたいかつてよ。するとな、かういんだ。調子を外さねいやうに、ちがつた音を出さねいやうにさいすれや、何をしたつてかまはねいつて父さんがいつたつてさ。どうだい、まあ、え。」

銀田は思ひ沈んだ風にうなづいて、

「そいへば、あの二人はちと變つて居たよ。あたりめいの無宿者ぢやないんだ。話さなかつたけか昨夜おれは途中で寺田の家の近くで後から追付いて馬車に乗せてやつたんだが、ちやんとした人間だと特別に氣が注いだんだ。清潔だし、ものいひも静だし、衣服はゴツ／＼してゐるが、質はいゝんだ。それでゐてな、荷物つていふと、あのバイオロンだけで何もねいのよ。」

「御前の今いつたも一つの手紙のは、どういふんだ。」と新右衛門が尋ねた。

銀田は妙に顔をにこつかせて、衣囊かぶに手を入れ、「手紙かい。さアさ、讀みなせい。」と折り疊んである紙片を渡した。

新右衛門は怖こそうに受取つて熟視した。帳面を一枚裂いたものらしく三度折つてあつて表面に「世間の方々へ」と書いてあつた。一風かはつた手蹟で、字體が亂れてゐて讀みにくかつた。判讀し得たところを記して見ると、次のやうなのであつた。

「民雄を世の中に戻さねばならぬ時機到來したるにより、余はその目的を以て出立せり。しかるに余は今病めり甚だ病めり。萬一中途にして余の斃るゝ事あらば、余は、余の事業の成就を諸君に託さざるべからず。何卒彼を愛育したまはれ。彼は善且美なる事を知るのみ。彼は罪もしくは惡につきては何事をも辨へず。」

終に署名がしてあつたが、それが走り書きの飾り澤山の字で、新右衛門がいくら眉根を寄せても何の意味とも分らなかつた。

「どうだね。」と銀田はあてにしたらしく催促した。新右衛門は頭を振つた。

「一向分らねい。なるほど無類の手紙だな。」

「その名が讀めるかい。」

「讀めねい。」

「たれにもよ、五六人見たものはあるが、誰も讀めねい。だが、子供はどうした。あいつの手紙は意味が分るかもしれない。」

「おら探して來てやるべい。どツか、そけいらに居るにちげいねい。」と平藏は引受けた。

併し民雄は「どツかそこら」には居なかつたらしく納屋にも、物置にも、臺所の上の寢室にも、どこにも居なかつた。平藏は悄しほれて、むづかしい當感顔をして戻つて來ると、丁度新右衛門の内儀さんが臺所口へ走り出して來たところで、

「銀田さん」といかにせき込んだ調子で、

「御前さんどこの御内儀さんが、いま電話を掛けてよこしてかういふのさ。妹の御近おちかさんが電話でね、バイオリンを持つた、ちいさな男の子が今來てるて知らせて來たつて。」

「お近おちかのところ！こゝから七八町もあるぢやねいか。」と銀田が驚きの聲を放つた。

「あすこに居るんかな。」と平藏はかけ出しさうにして、「しやうのねい奴やつだ。飯食つてる間に抜け出し

たに、ちげいねい。」

「そうなのだよ。だけれど亭主おまさん——銀田ぎんたさんもさ
—あの子をあんな風に出してやつては不可いけないと
思ふよ。」

と御内儀ごうちぎさんは、慄へ聲で訴へた。

「御前ごぜんさんの御内儀ごうちぎさんの話だとね、あの子が四辻
でどつちへいつていゝか分らないで泣いてゐたつ
て御近ごちかさんが話したと。あの子は家へ歸るんだつ
ていつたさうだが、山の上のあの情なさけない家の事を
いふんだらう。獨りでそんな事をさせて置かれは
しない。あんな子供に。」

「今どこに居るんだ。」と銀田ぎんたが訊いた。

「御近ごちかさんこの臺所で、パンと牛乳で御飯ごはんをたべ
てゐるさ。食べさせるのに大變骨が折れたさう
だよ。あの子を如何したらよかるツていふんで御
まへさんの御内儀ごうちぎさんに電話を掛けたのさ。あの
子がお近ごちかさんのとこに居るつていふ事を、御前ごぜん
さんに知らせなければ悪いと思つたんだらう。」

「それやそうとも、こゝへ歸つてくるやうにあの子
に云へつてお近ごちかにいつてやつてくれ。」

「お近ごちかさんも歸らせやうとしたんだつてさ。すると

いゝえ、折角ですが歸りたくありませんツていつ
たさ。父さんがもし逢ひたいと思つた時、すぐ
探せるやうに家へ歸つてゐるんだつて。銀田ぎんたさん、
あんな風にしてあの子を行かせるわけには行かな
いよ。恐ろしい林の中でたつた一人であの子供は
死んでしまふはね。假にそこまで歸りつけるとし
てもさ。それさへ私は如何かと思ふ位だ。」

「もつともだ。」銀田ぎんたは眉を寄せて、

「それにあの子の手紙もあるし、あのな。」と元氣付
いて「其手紙で誘おびきよせられると思ふがどうだら
う。親父を天にも地にも換へられぬ様に思てゐる
んだから。おい〜」と急に新右衛門の内儀に指
圖をして、「御前ごぜんさんうちの妻つまにかういつてくれま
せんか。いや、それよりも直接ちかかに御近ごちかに電話をかけ
てね、あの子に親父さんから手紙が來てゐるが、こ
こへ戻つてくれれば渡すつてさういつてくれつて。」
「あゝ、承知〜。」と言ひ捨て、彼女かのじよは家の中へ急
いで入つた、やがてすぐ含笑にこにこして戻つて來て、

「もうあの子を出掛けたつて。」さうなづいて「有頂
天になつて悦んだつて御近ごちかさんがいふんだよ。あ
んまり急いで御飯ごはんも半分たべかけていつてしまつ

たつて。無事に戻つて来るだろうよ。」

「無事に戻つては来るだろうさ。」と新右衛門はむづかしい顔をして、

「だが戻つて来てから、あいつを如何するかつて事の足になりやしねい。」

「だがね、この手紙があるから、いくらか便りになるだらう。」と銀田は宥めるやうに意見を述べた。「まあもしか、ならないとしても、おれはちとも心配はしねい。あんな丈夫さうな子供だもの誰か使つてやるツていふものが出るだらう。」

「死人は金を持つてゐたのか。」と鳥山が訊ねた。

「小銭が五六銭、言ひ立てる程の事はねい。子供の手紙の中に親戚がどこに居ると書いても無ければ、この村で葬つてやらなくツちやなるめい。」

「バイオリンを持つてたぢやねいか。子供も一つ持つて居たツけ。いくら金にならないものかな。」と鳥山の丸い眼は狡さうに光つた。

銀田は徐ろに頭を振つた。

「ひよつと買手があればだ。併し誰が買ふもんか。此村ぢや、郡司の五郎を除けちや弾くものはねいし、五郎は一挺持つてゐらあ。御まけに、あいつ

は病氣であるもの、自分と妹ツこを食べていくさへやつとだ。バイオリンとこぢやねい。あいつは買ふ氣遣なし。」

「む——さうかもしれない、さうかもしれない。」と鳥山は澁々同意して、

「御前のいふ通り此村でバイオリンに用のあるのは五郎ばかりだな。それに、そのバイオリンだつて、たいした價のものぢやあるめい。して見るとやつぱり村の御厄介かなあ。」

「さうだ—だが—おら差出た事いふぢやねいが」と平藏が横から口を出して、

「あの子の前ぢや内所にして置きなさるが可いとおもふ。あいつに、何訊いたつて、はあ、駄目なんだから。そこだけはもうまちげいねいんだ。それに萬が一、さかさまに、あいつの方から何か尋ね出したが最後、こつちが困つちまふべい。」

「貴様のいふ通りだ。」銀田は妙に笑つて、

「訊き糺しても無駄なんだから、こいつは、子供の前ぢやだんまりツことしやう。それやさうと、あいつ、さつとさ此處へ來れやいゝにな。あいつに宛てた手紙の内容が知りたいんだ。どこの誰だつてい

ふ謎を解く手引になるかと頼みにしてゐるんだ」

「とにかく出掛けられたつていふから。」と新右衛門の御内儀さんは、臺所へ行きかけて繰り返した。

「氣長くさへ待つてゐればきつと此處へ来るよ。」

「そうよ氣長く待つてゐれや来るだろう。」と無愛想に新右衛門は同じ事をいつた。

銀田と鳥山は荷馬車の腰掛に身を落著け、平藏は主人の方を心配らしくまた言譯がましく盗み見てから、入口の最下の段に腰を下した。新右衛門は、臺所の椅子に窮屈さうに掛けてゐた。新右衛門は決して身を樂な姿勢に置かない人で、なんでも事をするのに窮屈なやり方を探し出して、きつとさうする仁だと平藏はよく言つてゐた。であるが、今朝風來の子供が戻つて来るのを待つなんて下らない用事のために、新右衛門が貴重な一日のきまり仕事を邪魔されても構はずにゐるのが、平藏には不思議千萬で實際眼に見てゐるからこれ眞實だと思ふ位なのであつた。

待つてゐる連中は、民雄の来るのを待遠しがつてゐたものゝ、彼が馬車まはしを走り／＼随分早くやつて來たので、さすがに驚かされてしまつた。

「どこにあんのですか、父さんから僕へ手紙が來て居るつてききました。」と民雄は息せき訊ねた。

「そうだ、手紙が來てゐるよ。そら、こゝに。」と銀田は折り疊んだ紙を早速に取出してやつた。

あせつてゐたものゝ民雄は、まづ大切さうにバイオリンの函を下に置いて、それから手紙を開いて一字も漏らすまいと讀み入つた。

子供が讀んでゆく顔付を、四人の大人は見守つた。涌き出る涙を眼をしばだゝいて拂ひ退けたなど見てゐると、こんどは華やかな紅色が顔に汐して、それがだん／＼濃くなつて終には子供らしいその顔が燃えるのかと思はれる程になつた。そして、手紙から上げた彼の眼も亦驚きに輝き渡つてゐた。

「父さんが、遠いところから僕に之を書いて御よこしになつたの。」と囁いた。

新右衛門は澁面をした。平藏は可笑しさを咳に紛らした。鳥山は、眼を丸くして嘲るやうに肩をすばめた。しかし、銀田は顔を鈍い紅に染めて、

「いゝや、」と途切れ／＼に「その手紙はな—えいと—ウンそうだ。御前の父さんが、御前にツて衣囊の中へ入れて置きなすつたんだ。」と終の方は一息

にいつてのけてしまつた。

民雄の顔は急に曇つた。

「僕は—便りがあすこから—と言ひかけて急に顔
をまた冴え〜とさせて「ですけれど、あすこから父
さんが書いて御よこしになつたとまあ同じですね。
僕にツて置いていらしつて、そして僕のする事が書
いてあるから。」

「何と書いてある。何と書いてある。」と銀田は聞き
落すまいと用意して、

「何をしろとか書いてあるかい、どれ御見せ。一同
に分るかな。それを讀ませてくれるだらう。え。」

「は…い…」と民雄は吃つた。行儀よく手紙を
差出したけれど如何にも氣が進まぬらしかつた。

民雄への手紙は、も一つとは大變ちがつてゐた。

全文は長かつたがあんまり役に立たなかつた。一行
〜はよろ〜の不揃であつても、一語一語は几帳
面に書いてあつた。之を讀むのは幼い子供だといふ
事を、忘れぬ親の心遣が見えてゐた。帳面の紙二葉
に記したもので最後に「父さんより」と唯一語書いて
あつた。

銀田は音讀した。

「民雄、父さんは遠いところで御前を待つて居る
よ。悲むではいけない。そうすると父さんも悲しく
なるから。父さんは歸つて來ないが、御前がいつ
か父さんのところへ來てくれるのだ。バイオリン
を頭に、弓を絃にあて、「父さん」といつて來るの
だ。その時にバイオリンでな、御前が置いて來た
美しい世界の事を父さんに話してきかさなければ
いけない。民雄、世界は美しいのだよ。それを忘
れてはいけない。もし、どうかして美しい世界で
はないと思ひたくなつたら、御前自分で、その氣
さへあれば世界を美しくする事が出来るのだとさ
う思ふのだよ。」

何處を見ても見馴れない人や、物のある、知らぬ
人の中に御前は今居るね。御前には解らない事が
あり、嫌な事もあろうが、怖れてはいけない。そ
して山へ歸りたい〜と人に逼つてはいけない。
御前のバイオリンの中に御前の欲しがるものはみ
んな入つて居るのだから。この事をよく覺えて御
前で。御前は、弾きさへすればいゝのだ。そうす
ると、あの山の家の上にあつた廣い宮が、御前の
頭の上に来てくれるし、山の中の森で仲よしだつ

た、いろ／＼なものが御前の傍に来てくれるよ。」

「いやはや、も一つのより猶といけねい。」と読み終つた銀田は唸いた。「實際何も書いてねいや。どうだ。あんな場合に筆をとるとしたら、何か意味のある事を書きさうなものぢやないか。何がつかまへどころのある、此子供は何者だ位の事をよ。」

何とも返事のしやうもなかつたので、一同は唯もつともだそばかりに點頭うなづいて不承／＼に同意した。

が、それが何の足しにも實はならなかつたのである。(四の終)

海邊にて

坊やが海邊に寝ころんでゐた時に、

家の人達が坊やに

木で出来た鋤を下さつた。

「濱邊の砂をほつてお遊び」と。

坊やのこしらへた澤山の穴が

コップのやうで空虛からっほでした。

その穴の一つ一つに海の水が這入つて来て、

とう／＼、はいれきれないほど一杯になりました。

スチープンソン

夏やすみ

めつきり暑くなりました。いよ／＼暑中休眠になります。これからしばらくは、子供達も、朝から晩まで、母様の膝もとにくらすことになりませう。幼稚園に行つて居れば、定めのおやつだけで我慢の出来る子供も、つひ手短にお菓子や、果物や、アイスクリームや、食べるもの飲むものが目につけば、そして、また、暑い／＼でゴロ／＼してゐれば、おれだりも出ませう。食へ過ぎぬよう、飲み過ぎぬようと、この暑いさかりには、母様方の苦勞もなが／＼でせう。ことに蚊帳の中の廻轉運動のげげしさには、薄い寝びえいらす位では、なか／＼安心も出来ませう。ことに疫痢といふ恐しい病魔は、とりわけ、五つ六つ位の幼児を好むときいておりますから、注意の上にも注意が大切でせう。

けれども、子供はやはり元氣なものです。眼もくらむやうな炎天にも、汗みづくになつて、印度人のやうに焼けて、蟬取りに、蜻蛉つりに餘念のない腕白盛りを見ますと、暑い／＼を口癖に團扇をはなすことも出来ないで、喘いでゐる大人の方が背をぬがればなりません。よく遊んで、よく眠つて、この一箇月たらずの休みの間に、背も伸び、肉もつき、顔色も染まつて、元氣にみちた子供達を、幼稚園に送りだし、これをむかへる先生方も、お友達も、た意氣あたるべからざるものでありたいものです。發育さかりの幼児達には、心も、からだも、この一箇月が實に貴い時となりませう。

面白くメタな夏休みの読物

芦谷 芦村 著

(賣捌所全國書店)

世界 一周 お伽旅行

最新刊

●太郎と花子がお伽のお爺さんにつれられて世界中をどびまはり、一つの國から一つづつ一番面白なお話を探しだして、三十二個國から集めた三十二編のお話を一冊にまとめたのが此本で、どれも今まで日本に來た事のない、封切りの新種、おまけに一國毎に其國の風景寫真を挿入し、地理と歴史を説明してあるからお伽齣を讀みながら、地理や歴史も覺へら
ずつと變た新趣向
坊ちゃん方やお嬢様方の夏休みのお友だちとしても、お中元のおうかい物としても是にこす物はございません

發行所

東京市神田區表猿樂町
振替口座東京五〇〇〇〇番

寶學館

四判極美本四百頁石版
彩色口繪壹葉凸版彩色繪
五葉寫版插畫拾貳個

定價 貳圓參拾錢
郵稅 拾貳錢

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

コドモ

編輯顧問 高島平三郎先生

幼童雜誌
良友

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に三十種に達してゐる。世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選べるゝであらうか單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか。

發行所 東京市小石川區 電話 六一八二 小石川 社モドコ 電話 六一八二

日本幼稚園協會役員

會長

湯原元一

主幹

倉橋惣三

幹事 (イロハ順)

井村くに

池田トヨ(會計)坂内ミツ(庶務)星野樂

和田實

和田くら

梶原楯土川五郎奈良山梅

向井琴柱

小向きみ

評議員 (イロハ順) 小山はな 小高つや(編輯)及川ふみ

乙竹岩造

吉田熊次 田中ふさ 野口幽香 安井哲

横山榮次

藤井利譽 下田次郎 日田權一

折井彌留枝

地方委員 (イロハ順)

大和田りよう 坪内きく 字式かん

久住モト

坂井ふで

司馬のぶ 望月くに 膳たけ

加盟保育會

- 東京市保育會
- 京都保育會
- 大阪市保育會
- 神戸市保育會
- 静岡縣保育會
- 名古屋保育會
- 香川縣保育會
- 福島縣保育會
- 吉備保育會

實物應用の運動具出來

廻轉スケート

定價參拾八圓

1 幼兒が開き戸(門の戸など)に片足を掛け一方の足で跳ねて行き、戻り、して嬉んで居ますのをよく見掛けます。之れは何處の幼兒もやつて居ることあります。其れを多人數で乗れる様に、活動的に廻轉する様に考案せられたのがこの廻轉スケートであります

2 ブラ下で片足を掛け片足で跳ねるのでありますから手を伸ばすこと、跳躍の運動が出來ます

3 東京市立、富士見幼稚園で始めて備へられたのであります。が幼兒の嬉びは考案者の豫想外であります

4 鐵製でありますから堅牢なることは申す迄もありません

5 四人乗りであります。が一人でも二人でも或は五人でも自由に乘て廻轉することが出來ます。危険の慮なきことは右幼稚園先生の立ち處に證明せられたことあります

東京 麴町三番町

幼稚園用品製造發賣元

フレールベル館

電話九段一三〇七
振替東京一九六四〇

明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可(毎月一回十五日發行)

幼児教育 第二十卷第七號

大正九年七月十五日印刷
大正九年七月十五日發行

印刷所

合資會社 杏

林 舎